

しんらん同人

NO. 509

10月号

二〇一三年十月一日発行 郵便番号171-0052  
 発行所 東京都豊島区南長崎一丁目三の八 誓願寺  
 TEL 3 6550 7 8228 FAX 3 6550 6 8820  
 E-MAIL SEIGANJI@RESET.JP

## 生か死か

「大病だから死ぬとは限らない。健康だから死なないともいわれない。いつかは死ぬにきまっているのだから、前もつて、くよくよと考えることはない。今日一日を楽しく有難いと感謝して生活すればいいと思っている。」一見明朗なあけつばなしの夫人の言葉である。

その夫人の、大病で臥っている主人を見舞った時に、



仏坐像

初期マトウラー仏の典型的な作品の一つ  
 中インドのマチュラーは西北インドのガン  
 ダーラと並んで最初に仏像を製作した。

「死に対する恐れはありませんか。安心して死んでゆけますか」とたずねた。横合いから、死ぬ話などやめて下さいと私の言葉を封じるように、それも夫を慰め、力ずけるようにいわれた言葉であつた。生きるか死ぬかと案ぜられるような人に、こんな質問をしたことも軽はずみの難をまぬがれないことを承知の上であつた。

死ぬかも知れない不安な気持を持つている人には残酷で、きびしい質問であつただろう。「そうですね。今日一日を楽しく感謝して生きられれば結構ですね」と、夫人の言うことばに同調するよ

うに言い、この家を辞した。なんとなく寂しい、暗い気もちであつた。

死ぬとは考えていない者にとつては死の話など馬鹿らしい事だが目前に死をひかえている者にとつては、これほど大きな問題は無いであろう。死を超越してゆくか、死を安らかに受け止める心が願わしくなるのではないだろうか。

「少しでも思うことがあると、これで死ぬのではないかと心細く思うことも煩惱のなすわざです」と親鸞聖人は仰せられています。そして「今まで迷い続けてきた、この苦悩の故郷は、捨てる事が難しく、まだ生まれた事のないお浄土を恋しいと思わないとは、なんと激しい煩惱であろうか」と。その愚かさ

に泣いておられる。その愚かさゆえに、煩惱激しきゆえに、如来はこの私を放したまわずしっかりと抱き取ってください。

大悲を信じ、やがて浄土に参らせていただく事を信じる以外にない。

どうしても生き抜くのだという力みもなく、みづからの業のままに、如来に計らわれて、よきように生かされる。死にたくないという思いを誤魔化して、悟り済ましているのでもなく、死を考えまいと逃げるのではない。死ぬのではないかと不安のまま、お浄土に参りたいとも思わないまま、そのまんまがお慈悲の中なのである。凡愚のまま、お慈悲に乗拓させて頂くのである。

死ぬときがきたら、死ねばいいと悟りますすのではない。死にたくないまんまが、お浄土に通わせていただくのである。死をおそれず平然と死んでいくために念仏するのではない。死ぬときはどうであろうとよ

い、今のこの身のままが如来のみ手の中にある。

必ず浄土に生まれさせずにはおかぬとの如来の本願なのだから、必ず浄土に生まれさせていただく、少しの計らいもいらぬ、計らいは役に立たない。ただ南無阿弥陀仏である。今回の病気はよき経験を与えてくださった。



### 不廻向とは

私は大学を出たところ九州で布教をしていました。ある寺で法座を済ませ、数名のご同行と座敷で世間話をしていましたら、一人のお爺さんがやって来て、

「今日は結構なお話有難うございま

す。ちよつとお尋ねしますが不廻向とはどういうことですか」といいます。

不廻向とは廻向の反対です。廻はめぐらす、向は差し向けることで、自分の行った善根功德をめぐらし、自分や他の者の悟りに差し向ける、亡くなった人の冥福を祈って追善供養することとも考えられています。浄土真宗では、

「廻向とは弥陀如来の衆生を御たすけあるをいうなり」

「真実信心の称名は弥陀廻向の法なれば、不廻向と名付けてぞ、自力の称念嫌わるるというは、弥陀の方より頼む心も尊や有難やと念仏申す心もみな与えたもうゆえに、とやせんかくやせんとはかろうて念仏申すは自力なれば嫌うなり」と蓮如上人が申された通りで、ご門徒でも間違つて受け止めてい

る方が多いようです。お寺でお経を頂戴することを供養する。先祖に供養するのを廻向とお考えになつています。廻向と供養とは意味も違いますが一緒にし

て、供養して下さい、廻向して下さいといえます。だが真宗では廻向するものはなにもなく、すべてが仏さまから恵まれていたのをいただくのですから不廻向です。

お爺さんはこれを持って来て問い掛けます。私は分からぬからだと思い、「いまお話したように仏さまからご廻向いただいているのだから不廻向ですよ」と答えましたら、曇鸞大師は、善

導大師は、源信僧都はこういつている、大無量壽経にはこう説かれていると次々と並べ立てます。私はそこまで知りませんので、

「そうですか」といいましたら、

「まあ、こんなわけですから不廻向も大変ですね、じゃあどうも」といつてお帰りになりました。尋ねに来たのか駈しに来たのかさっぱり分かりません。

十一月二十四日(日)

午前十時から

報恩講法要厳修

講師高田慈昭師

## 誓願寺の新たな船出

昭和三十八年七月に父、岡本泰雄が誓願寺を創立して、今年はちょうど五十年の節目の年にあたります。兄、泰仁が継いで三十数年、開法道場、誓願寺の法灯は連綿と護られてきました。昨年七月に坊守、英子さんが亡くなりその後、兄も健康状態が悪くなり、三人の息子たちのうち誰かが後を継ぐであろうと思つていましたが、残念ながら誰も継がないという返事、



どうかしなければと、福岡に嫁いだ妹、恭子夫妻に誓願寺に入ってもらおうようお願いしたら、快く承諾してくれました。恭子の主人、古賀尚之は昨年の十一月に得度を受け、現在誓願寺の僧侶として、また、妹恭子も坊守として奮闘中です。

今年五月に開かれた誓願寺の臨時役員会において私が誓願寺の住職代務を勤める事が決定されました。

その理由は一つは兄の健康状態。二つには誓願寺の後継者が決まっていないこと。三つには誓願寺の土地の問題を解決するためでした。誓願寺の土地は借地で、底地権を地主から買い取ることが、腰を据えて活動するためには必要であると判断したからです。兄と誓願寺の責任役員、門徒総代の同意を得て、兄が誓願寺の住職を退き、私が住職代務となり、底地権を買い取ることが決定された次第です。

私は六十六才、尚之は六十八才で二人ともあと何年頑張れるかわからない年齢になっていますので、できるだけ早く誓願寺の若い後継者を

育てなければと思つています。新たな誓願寺の船出、今後ともどうぞよろしくご支援、ご協力、ご指導の程、お願い申し上げます。 合掌

大恩寺住職 岡本信之

## 前住の誓願寺への願い

古い「しんらん同人」を見ていたら、誓願寺に対する前住の願いがしるされていた。

真宗、親鸞聖人の教は聞法第一である。仏法は聞くにきわまる。とも言われている。座を重ねて聞くことが大切である。聞いてわかったからもう聞かなくてもよい。というようなものではない。死ぬまでおきかせいた。たくのである。

## 新しい納骨仏壇

今 元気なときにあなたの納骨仏壇を用意しませんか。核家族となり、昔のように親子の関係が変わりつつあります。安心して生きていくための準備が必要です。三十万円から九十万円の納骨仏壇を用意しました。

一人用と家族用です。

お気軽にご相談ください。



如来の本願を信じ、念仏申す身となつて初めて、安らかな日々、力強く明るい日々が送られるのである。それには聞く以外にない。一心に求めて聞けば必ず心は開かれる。それまで聞いて聞いて聞きぬかねばならぬ。御慈悲が聞こえたら、御慈悲の限りなさをきかずにはおれないものである。

手足が不自由になり、動けなくなつたら、もう参ることが出来なくなる。手足の丈夫なうち、健康な時に聞きぬくことである。誓願寺は聞法の道場である。唯そのみに誓願寺の存立の意義がある。老若男女の区別は無い。

### 十月御法座案内

十三日(日) 午前十時 聖典講座

正午 健康相談

講師 佐藤公彦医師

二十日(日) 午前十時 なかよしくらぶ

二十二日(火) 十一時 歎異抄の会

廿七日(日) 午前十時 聖典講座

階級の高下貧富のへだたりは問題ではない。問題にはならない。素っ裸になって、真実を求める者の、聞法道場である。

### 釈尚文 独り言

今までに経験したことのない事象が後から後から発生し、あつという間に半年が過ぎ去りましたが、まだお寺の生活リズムに慣れない自分と、僧侶という立ち位置に戸惑う自分が居ます。このような気持ちは今まで味わったことはありません。

何故なのか考えた結果、先が見通せない不安が一因だと思いましたが。

今世間では二〇二〇年の東京オリンピックの話で溢れています。様々の分野の専門

家や政治家、更に一般の人々が七年後の夢を語っています。

来年四月の教師教修のため十一月には教師検定講習会を受講することが当面の課題ですが、今一度初心に帰り「七年後の誓願寺」を思い浮かべ、新たな力を付けたいと思つた次第です。

東京オリンピックの開会期間中に多くのご門徒の方々が誓願寺にお参りをされると同時にスポーツ観戦を楽しまれる光景が実現できれば嬉しいこ

とです。

あんな誓願寺だったら。こんな誓願寺だったら。等々皆様のご意見をお待ち致しております。

### 編集後記

◎彼岸会も無事終わり、十一月には報恩講を迎えます。今年病気がちで寝ていたら終わりという感じ。  
◎ナナがちよつと具合が悪そうでしたが、元気になりました。

